魔法少女リリカルなのは―Zwei Geschichten―

カレーパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは―Ｚｗｅｉ　Ｇｅｓｃｈｉｃｈｔｅｎ―

【Ｎコード】
Ｎ０４６８Ｚ

【作者名】
カレーパン

【あらすじ】
新暦６５年、春。
第９７管理外世界・現地名称地球に、古代遺産（ロストロギア）・ジュエルシードが流れ落ちる。
そこから始まるのは、少女二人の出逢いの物語。そして、少年二人の見守る先へ……。
魔法少女リリカルなのは―Ｚｗｅｉ　Ｇｅｓｃｈｉｃｈｔｅｎ―。始まります。

プロローグEins

夢。夢を見ている。

あの娘と初めて話した日。

夕焼けに赤く染まった世界で、俺は、毎日公園で涙を流している女の子に声を掛けた。

『……そんなことしてて、楽しいか？』

泣いている女の子に聞くことじゃない。

しかし、その時の俺は、なにを言っていいものか分からなかったんだろう。今よりも更に口下手で、酷く人見知りしていた俺には、あれが精一杯だった。

それでも、あの娘は放って置けなかった。

だから、声を掛けた。

後先なんて考えず、ただ放って置きたくなかった。その小さな背中を、支えてあげたかったんだ……。

「……ん」

朝の定時。
目覚まし時計が鳴る数分前に目が覚め、スイッチを切る。それと同時に、枕元に置いてある携帯がなった。
サブディスプレイには、『なのは』の文字。携帯を今年買ってもらってからは、毎日、毎朝かけてくる。俺を起こしてくれようとしているんだろうけど、いつも俺の方が先に起きているから、余り意味を持っていない。
それでも、俺はこの電話は嫌いじゃない。
その考えに少し笑い、電話に出た。

「はい」
『あ、おはようございます。和貴さん』
「ああ、おはよ」

耳には、いつも通りの猫を彷彿とさせる、快活な少女の声が届く。

「今日は、ちゃんと起きてるみたいだな」
『うっ……！　昨日のことは忘れてください……』

少しからかいながら、俺は昨日のことを思い出す。

いつも通り電話がかかってきたのはいいのだが……私は今、とても眠いです。といった感じの声だったのだ。
そんな無理しなくても、俺はいつもこの時間に起きてるんだがな。

「ん、分かった。忘れるよ」
『はい。お願いします……』

声が萎んでいるので、なのはも昨日のことを思いだして落ち込んでいるんだろう。トレードマークのツインテールが、力なく垂れ下

がっている姿が目に浮かぶ。
流石に朝からテンション激減はダメだろ。と思い、直ぐに慰める。
「なのは、安心しろ。面白かったから」
『にゃっ！？　全然安心できませんよ！』
「頑張れ」
『はい！　……って、和貴さんが原因じゃないですか！』
いつも通りの朝だ。

電話を終える。これも、もう日課になってるな……。
制服に着替え剣十字のネックレスをかけ、洗面所で顔を洗う。
「……」
顔を上げれば、自分の顔を見れる。
日本人ではあり得ない、純正の白髪。蒼と黒の虹彩異色の眼。明らかに、常人ではあり得ないものだ。
だから、俺は誤魔化し続ける。
伊達眼鏡をかけ、少し長めの前髪を眼にかける。これで、大体気付かないもので……かれこれ一年――一人を除いて――クラスメイトにはバレていない。
「しっ……！」

頬を叩き、気合を入れる。
さあ、今日も頑張ろう。

池田（いけだ）　和貴（かづき）。
私立風芽丘学園に通う、高校２年生。
勉強が少し苦手で、スポーツは平均以上には出来るくらい。
人見知り、口下手、無口、根暗。中学からの友人には、そう指摘された。
他に紹介するとなると、髪の毛は地毛だと言うことくらいだ。

他人に教えることではないが、両親とは血が繋がっていないというのも、だな……。

「おはよう、かづくん」
「……おはよう」
「ん、二人ともおはよ」

池田夫妻。
捨てられていたらしい、まだ赤ん坊の俺を拾ってくれた。心優しい人達だ。
歳的には、普通に今の俺くらいの子供が居てもいいんだけど、どうも子宝には恵まれなかったとか。ついでに、先が義母さんで後が義父さんだ。

朝食を三人で食べ、義父さんと一緒に家を出る。

「二人とも、行ってらっしゃい」
「行ってきます」
「……行って来る」

俺は学生。両親は共働きなのだが、仕事について詳しくは知らない。ただ公務員だと言う事と、よく帰ってこないということしか知らない。まあ、今頃知ろうとも思わないがな。

「……気を付けてな」
「そっちも。行ってきます」
「……ああ」

途中まで一緒に歩き、分かれて学校へ。

学校の授業をしっかり受け、昼休みには屋上で昼飯を食い、寝ながら空を見上げる。

「……」

こうして空を見詰めていると、何故か落ち着く。
青いキャンパスに筆を振って白い絵の具を撒き散らしたような、そんな空好きだ。まあ、夜の星空も好きだけど……。

「お、やっぱりここにいたか」
「ん？　なんだ、お前か」
「なんだはねえだろ……」

屋上の校舎から顔を出したのは、俺のオッドアイを知っている中学からの友人である高城だ。
いつもの笑顔を張り付かせ、寝っ転がっている俺の近くまで来る。

「なあ、今日放課後暇か？」
「なんで」
「合コン。お前もどうだよ」
「いい。興味ない」

何を言うかと思えば、俺が絶対に行かないようなことを聞いた。
理由は大したことない。
ただ、今日は両親二人とも帰ってこないと聞いてるから、家のことを俺がしないといけないからだ。

「相変わらず付き合いわりいのな」
「ほっとけ……」

そう言って、俺は高城に背を向けるようにごろりと横を向く。
言われなくても、付き合い悪いのは自覚している。でも、家のことは俺がしっかりしないとだし、なにより大勢で何かするっていうのは苦手だ。

「じゃあ、俺の用事はこんだけだから。あばよ～、池田っつぁ～ん」
「俺は、とっつぁん役をやればいいのか？」
「……そこはそのままノッてくれよ」
「お、わりぃ……」

ノリの悪さも、分かってる……。

「たく……。じゃな」

「おう」

高城は戻るようなので、軽く手を挙げて送り出す。

校舎に続く扉が閉じたのを確認し、軽く溜め息を吐く。

「……やっぱ疲れる」

高城と話すのが、ではなく。話すこと自体が疲れる。

とことん、俺は人付き合いがダメなようだ。

まだ昼休みの時間は残っているので、伊達眼鏡を外して目を閉じる。春の暖かな風が、俺の頬を撫でていった。

寝過ごした俺は、見事に午後の授業はサボることになってしまった。

やっちまった……。

「……ま、いっか」

伊達眼鏡をかけて教室に戻り、鞄を持って帰ることにした。

やっちまったことは、考えても仕様がない。さっさと帰ろう。

「それはどうなんですか？」
「仕方なかったんだ。昼寝は、どうも普通に寝るのとは違った誘惑がだな――」
「それでも……ダメですよ」

下校の途中。知り合いとあった。

高町なのは。
今朝の電話の主で、私立小学校に通う小学3年生だ。
この子と会ったのは、いつだろうか……。確か、俺がまだ小学生の時だったかな。
小学生のくせに、変に落ち着きがあるし聞き分けはいいしで……まあ、付き合う方としては有り難いんだけど。もっと子供らしくしてもいいと思うんだけどな。

「どうかしたんですか？」
「いや、どうもしない」

俺が顔を見ていたのに気付いたようで、小首を傾げてこちらを見てくる。別に言う事でもないので、適当に誤魔化しておく。

「和貴さんは……」
「ん」
「和貴さんは、将来何になりたいって言うのは、決まってますか？」

不意に聞かれたその質問。また何か悩んでるのか？
なのはの悩みは、小学生が考えるには早すぎることだと思う。たぶん、授業とか友達の影響なんじゃないかと、思う。
答えてやりたい。でも、俺にはこの子が望む答えは持ち合わせて

いない。

「決まってない、お先真っ暗だ」

「そう、ですか……」

これは、直ぐに解決なんてできないことだ。

ゆっくりと解いていけばいいことだ。まあ、俺も手伝えることは手伝おう。

「お、たいやき食おう。たいやき」

「え？」

「ほらほら、行くぞ」

「あわわ！」

いつまでも同じこと考えていても仕方ないので、無理矢理話を変えて、有無を言わさず手をとって引っ張っていく。

こんな事でもしなければ話を変えられない自分に気持ちが落ち込む……。

「４９８……４９９……５００……っ！」

帰宅後。干してある洗濯物を取り込み、夕飯を食べた後、毎日の日課である竹刀の素振りをしていた。

毎日５００回。

どうしても出来ない時――風邪ひいたりしなければ、約１０年毎

日欠かさず行っている。
ふぅ……と、熱くなった息を吐き、窓辺に座る。
俺が素振りをやるようになったのは、剣道を始めたからだ。まあ、今では部活はせずに素振りをしてるだけになっているけどな。

「……今日は綺麗だな」

窓辺で空を見上げれば、夜空には星が瞬いている。
ここでもそれなりに綺麗なのだから、違う所に行けば、もっと綺麗な夜空も見れるんだろう。……それを見てみたいが、やはり面倒なのでこの夜空が一番か……。

この夜、俺が知らないところでは、魔法の種が蒔かれた。
ジュエルシード――――。
俺がその存在を知るのは、もっと後になる。

プロローグＥｉｎｓ（後書き）

次回『プロローグＺｗｅｉ』

天は輝き、全てを照らす。

プロローグZwei

――――――イラつく……。
迫ってくる拳を無視し、自分に当たる前にカウンターで腕を振り切る。

「おらぁっ！」
「邪魔、だっ！」

命中。いかにも不良な高校生の右頬に、オレの拳が突き刺さる。
いつもの感触だ。個々人によって少し違うが、人を殴った感触なんて殆んど変わらない。
気分のいいものじゃないが、もやもやしている気分を晴らすには、喧嘩が丁度いい。

「て、めぇ……」
「うっせぇよ」
「がっ！」

足首を掴んできたやつの顎を蹴り上げる。
十人くらいの高校生が、地面に伏して呻き声を出している。その中で立つオレは、傍目にどう見えるのかは知らねえが、いい風には映らねえだろう。
たぶん、もう二年くらいこんなことをしてる筈だ。
学校をサボって遠見市に出て来ては、こいつ等みたいないかにも不良なヤツ等相手に、殆ど毎日喧嘩三昧。
でも、前はもっと気分が晴れたのに、今では殆んど――と言うよ

りも逆にムシャクシャしてくる。

「だぁ……くそっ」

ボリボリと頭を掻きながら悪態をつき、海鳴市に戻ることにした。

オレ――山神（やまがみ）　侑斗（ゆうと）の中二の春は、イラつきに満たされていた。

「あ……？」

臨海公園の入り口を横切ろうとしたオレの視界の端に、金色の糸が引っ掛かった。

いや、違う。アレは髪の毛か……。

「――――――――」

目を向けた先の公園の中には、金色の綺麗な髪のガキがいた。

別に、海鳴に住んでいれば外人なんて珍しくもない。

何故かこの町には外人が多い。病院に行けば銀髪の女医者がいるし、警察行けばそいつに似た女刑事がいる。それに、偶に金髪と青紫髪のガキも見かける。

でも、平日のこの時間帯じゃあ、確実に小学生のアイツは異質だ。

いや、中学生のオレも十分なんだが、アイツは学校サボるようなヤツには見えない。

……人は見かけによらないってやつだろ。

「……ま、いっか」

俺は、他人にどうこう口出しできる人間じゃない。特に学校に関しては……オレ自身がサボってんだからな。
頭を軽く掻き、その場から離れて学校へと向かった。

別にオレだって一日も学校に行ってない訳じゃない。
毎日必ず、午後に学校には来ている。ただ授業に出ても全然聞いていないし、大体は屋上で寝ているか、保健室で寝ているかだ。
今日は少し早かったようで、まだ昼休み前の授業中の様だ。ま、どうでもいいけどよ……。
屋上へ直行し、そのまま寝ることにした。あぁ、ダル……。

夢の内容は、なんでか脳裏にへばり付いていた。
ただ空を落ち続ける夢だ。いや、ただ落ちるだけじゃなく、なにかに手を伸ばしていた。
……何だったかは分からない。どうでもいいことだ、夢なんて。

授業の終了を告げるチャイムを目覚まし替わりに起き、学校から家へと帰る。
夢で思い出した、数日前の夢も変なものだったな。ガキの声が、ただ只管に助けを求める声の夢。ちょっとした悪夢だ……。
こんなことを思い出したのも、同じ日になんかあったらしく、工事中の獣医周辺を通ったからだろう。

「……夢くらいで、なに考えてんだか」

言葉にして考えてることを変える。
近頃は、穏やかなこの町も慌しい。それもこれも数日前に起きた怪樹のせいだろう。あの訳の分からねえ樹のせいで、町の至る所で工事をしている風景が見られる。
知り合いのおっちゃんも忙しそうにしてたっけな。

「……ただいま」

家に着き、玄関を開けながら小さくそう呟いた。
返事なんて帰ってこないのは分かり切っているが、口をついて出ちまう。……前の癖みたなものだ。
靴を脱いで直ぐの階段を上り、部屋に入ってベッドに突っ込む。

「――――――――――――――――？」

イラつきが収まらない。このままだと、ストレスで禿ちまいそうだ。どうにかしないと……。とは言っても、やる事なんて一つしかないけどな。
――――――――喧嘩だけが、今のオレを形成している。

ビルが林立する遠見市は、夜中のこの時間でも光を失わずに賑わいがある。
そして、光が届かない路地裏は、また違う賑わいを見せていた。

「が、ぐっ……」
「ぐぁ……う゛……」

呻き声の合唱に、腕を振り拳が人間を殴る音。男の野太い雄叫び――絶叫。
結局、その場は昼頃と同じ様相となっていた。立っているのはオレだけで、周りは――死んじゃいないが――死屍累々状態。
そして、オレのイラつきも昼頃と同じ……いや、もっと酷くなってきたかもしれねえな。今の状態は、昼ごろを８５℃くらいの沸点だとすると、今は７０℃くらいだな。沸点低くなって少しのことでキレそうになっちまう……。

自分の状況に辟易しながら、不意に地面の端に光る物を見つけた。青い、魅入るような輝きの中に、懐かしい光を感じる。
宝石のようなその石にオレは、知らぬうちに手を伸ばし、摘み上げる。

「なんだ、これ……」

宝石を隅々まで見て、そう呟いた。
傷がない。いや、人の眼だと分からないものがあるかもしれないが、ざっと見たところ分からない。
まあ、金になればそれでいいか……？　そのままポケットに突っ込もうとして――――――

「っ――――――――――！？」

咄嗟に背後へと振り向く。
路地の入口。そこに、金色の髪が舞っていた。髪の長さと体の線から女であることはが分かる。
光りに満ちた大通りを背にしているからか、顔がよく見えない。
それにしても何だ、このガキ……。
普通と違う『ナニカ』を感じ、背に嫌な汗が滲む。この感覚は、

数か月前に喧嘩したいけ好かない白髪野郎と同じだ。その時の事を思い出し……僅かに身構えた。両手首にあるブレスレットが小さく鳴る。

「あの――――――」
「……なんだ」
「あ、えっと……その手にある物ですけど……」

鈴を転がしたような澄んだ声に、少し気後れするが、何とか立て直す。
こいつが示したのは、オレの手にある物。つまりはこの宝石か。

「これか？　今、拾った。もしかしてお前のか？」
「……違います。でも、どうしても必要な物なんです……」
「……」

目が慣れてきて、こいつの顔がしっかり見えた。その目には、色々な感情が詰まっているように見える。
……訳あり、ってか。
この石が、こんな目をさせるほどにほしい、と……。ま、いいか。

「――――――落とすなよ」
「え……？」
「ほら」

オレは石を、ガキに向かって放った。
少し慌てていたが、無事に取れたらしくほっとして……何故かこっちをジト目で見てくる。
確かに、大切な物投げられたら不愉快だろう。オレが気を遣ってやる義理もないけどな。

「じゃあな」
「あ……待って」

ポケットに手を突っ込み、ガキの横を通って表通りに出ようとして、何でか呼び止められた。
軽く振り返ってみると、本当に止まるとは思わなかったのか少し戸惑っているようだ。少し待つと、言い辛そうに、ゆっくりと口を開いた。

「その、――――――ありがとう」
「ああ。もう時間も遅え、気い付けて帰れよ」

ガキの浮かべる笑いに、こっちも軽く笑って返し、再び背を向けて歩きだす。
イラつきは、何でか少し収まっていた。
……それにしてもあの石は、結局何だったんだ？

魔法の宝石、ジュエルシード。
これが……ま、どうでもいいか。とりあえず、これがオレのターニングポイントだ。

プロローグＺｗｅｉ（後書き）

あいさつが遅れてしまいましたが、作者のカレーパンです。
先ずは、読んで下さった方々に最大級の感謝を。ありがとうございます。
私の作品が初見の人は初めましてです。
他のものを知っている人は、「またか……」と生温く見てください。

とりあえずこれでプロローグ終了です。

プロローグ書き終わって気付いたのですが、これからの事を考えると三人称の方が良かった気がします……ｗ
まあ、今頃仕方ないので無印はこのまま行きます。

それでは、また次回で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0468z/

魔法少女リリカルなのは―Zwei Geschichten―

2011年12月11日21時53分発行